

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

ashihara.emi@yki.jp

Vol.32 美しきかな、わが人生

ざっと数えると、10 回ほど転職している。全く異なる業種を転々としてきた。今でこそスティーブ・ジョブズが“Connecting the dots”と明言を残してくれたけど、当時、友人には「やってることに統一性がなさすぎる。もっと自分の人生を考えろ!」と叱られていた。心惹かれれば、やってみるという軽さでいたと思う。

そんな人生で、一度だけ、クビになったことがある。「そろそろ安定した職を……」と考えている時期だった。

国際見本市なども運営するコンサルで、プロジェクトマネジャーとして雇われたつもりが、たまたま空席となったフランス人社長のアシスタントになってしまった。

社長とは相性が合わず、唯一、一致した意見が「我々と一緒に働けない」だった。自分からは言い出せなかったが、社長からそう告げられた。つまり、職を失った。

ショックだった。近くの公衆電話から母に電話した。

「クビになっちゃった」

「じゃあ、次を探さなくちゃね」

電話の向こうに母の優しい笑顔が見えた。当時は職場に行くのがつらかったので、筆者も内心ホッとしていた面もある。でも、これからどうしよう? 怖かったが、現実をちゃんと受け入れたとき、運命の女神様はほほ笑む。

「セミナーなどの運営ができる

人を探しているところがあるが、やらないか?」というオファーが友人から届いたのは、それから間もなくのこと。前職の経験を活かせるチャンス! 程なくして次の職に就いた。そこで知財の世界に出会うことになるなんて夢にも思わぬまま……。

嫌々ながらでも一度手にした職を手放したくない気持ちがあったはずだ。ぬるま湯のような comfort zone を自ら離れるには勇気が要る。

でも、人生には、そんな決断をしなければならないことだってある。そうでなければ前には進めない。幸い、筆者の場合、気の合わないボスが未練を断ち切ってくれた。痛みは伴った。恨んだり、悔んだり、もがき苦しんだり。しかし、彼がそうしてくれなかったら、今日の筆者はいない。だから感謝すべきなのだろう。

自らが許容し難い事態に陥ったときでも、それをちゃんと受け入れて前を向く。フランス語の“C'est la vie”

(セ・ラ・ヴィ:それが人生さ)は、諦めの言葉ではなく、そこから出発するための言葉なんじゃないかと思う。

元ボスは誰に電話するときでも必ず“La vie est belle?”(人生は美しいかい?)と聞いていた。日本という異国で大変な思いをしながら事業を立ち上げ、子どもを事故で失うという苦しみも経験したらしい。筆者は彼を好きになれなかったけど、この言葉を聞くのは好きだった。

今日つらいことがあったとしても、一生懸命生きていれば、素敵な何かに出会うだろう。そんな可能性をいつでも持っている人生は、美しい。だから、一歩前に出る勇気を持とう。

筆者はどこにいるときも、心の旅の途中で立ち寄った空想の街「マルティネル」でこの原稿を書

いてきた。川沿いを散歩し、木陰のカフェ・テラスに立ち寄り、思索にふけた。でも、そろそろこの街にも別れを告げ、旅を続けようと思う。人生は短い。新たな一歩を踏み出し、新しい自分を見つけよう。そしていつの日か、また違った街から皆さんに心のメッセージを伝えられればと思う。

さようなら、マルティネル。そして、ご愛読いただいた皆さん、また会う日まで!

